平城京の条坊道路　－交差点と橋－

平城京跡（左京五条四坊）　奈良市大森町

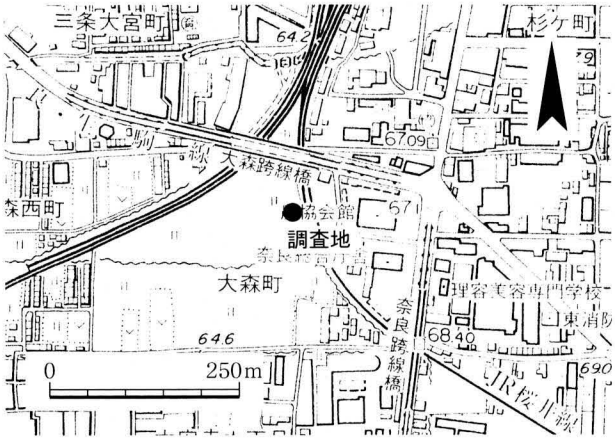
JR奈良駅から南へ500m程の場所に広がる水田地帯で進められている奈良市の区画整理事業に関連して、発掘調査を行ったところ、平城京東四坊大路と五条条間北小路の交差点を明らかにすることができました。また、大路、小路それぞれの道路側溝に架かる橋が残っていることもわかり、奈良時代の道路事情を知る貴重な成果を上げることができました。

調査の概要　これまで、今回の発掘区の北側で平成13・14年の2カ年にわたり発掘調査を行っており、東四坊大路とこれに面する左京五条四坊十六坪の宅地を見つけています。また、平成13年には西へ2坪分行った東四坊坊間路と五条条間北小路の交差点でも調査を行っており、東四坊坊間路の東側の道路側溝と五条条間北小路の南北両側の道路側溝を見つけています。これらの調査により、この周辺では地形との関係から、南北方向の道路排水が、最も地形の低い位置にある五条条間北小路の道路側溝に集められ、西へ流されていることがわかっていました。

今回の発掘調査で発見した遺構には、東四坊大路とその東側の道路側溝、五条条間北小路とその南北両側の道路側溝、道路側溝に架かる橋、側溝の護岸、五条五坊一坪の東面及び南面を区切る築地塀、その塀の雨落溝、排水のための暗渠、宅地内の建物、塀、溝、土坑があります。

東四坊大路と五条条間北小路の交差点を検出しましたが、このとき条間北小路の北側道路側溝が東四坊大路の路面を横断するように造られていることが明らかになりました。

東四坊大路は幅が17.4mある南北方向の道路です。路面は中央から両側の道路側溝に向かい緩やかに下り、蒲鉾状になっています。道路の中軸線に合わせて、条間北小路の北側道路側溝を渡る木橋が架けられていました。この橋の上流側には、多くの祭祀遺物が溜まっていて、人面墨書土器や、ミニチュア土器、土馬、斎串、大型の人形などが



調査地位置図（1/10,000）

出土しました。さらに、道路側溝の北岸近くから多くの馬の骨も出土しています。また、この橋の近くでは側溝からの水の溢れによって路面が大きく浸食され、溝が最終的に埋まる段階では溢れた水で湿地状になり、通行可能な路面幅は3m程度になっていました。この状況は条間北小路との交差点南側でも同様に見られ、側溝の水が想像以上に路面に溢れていたことが窺えます。

一方の五条条間北小路は、道路の幅が6.7mある東西方向の道路です。道路の中軸線よりやや南寄りの位置で、東四坊大路の東側道路側溝を渡るための橋が架けられていました。

条坊道路の交差点　今回の調査で確認した条坊道路の交差点では、交差点の路面に道路側溝からの水が大きく溢れ、おそらく当時の人は通行に難渋していたであろうと窺えます。また、大路の路面を小路の道路側溝が横切り、周辺の地形に合わせた排水が図られていることがわかりました。これは平城京の条坊施工にあたり、どの程度当時の地形が影響したのかを考える上で良好な資料を得られたと言えましょう。さらに、道路側溝に架かる橋の近くからは多くの祭祀遺物が見つかっていますが、これらは道路交差点などで行われる祓、道饗祭、もしくは祈雨祭に関連した出土品であると考えられます。どのような人々が、道路交差点に集まり、まじないに参加したのでしょうか。

平城京で行われる最も大きなまじないが、国家的行事である大祓でした。この大祓は天皇と都城を災いから守る目的で行われたもので、朱雀門の南で毎年6月・12月晦日に行うほか、臨時に大嘗祭、疫病流行などに際しても行われました。一方、平城京の各場所でも、いろいろなまじないが執り行われていました。

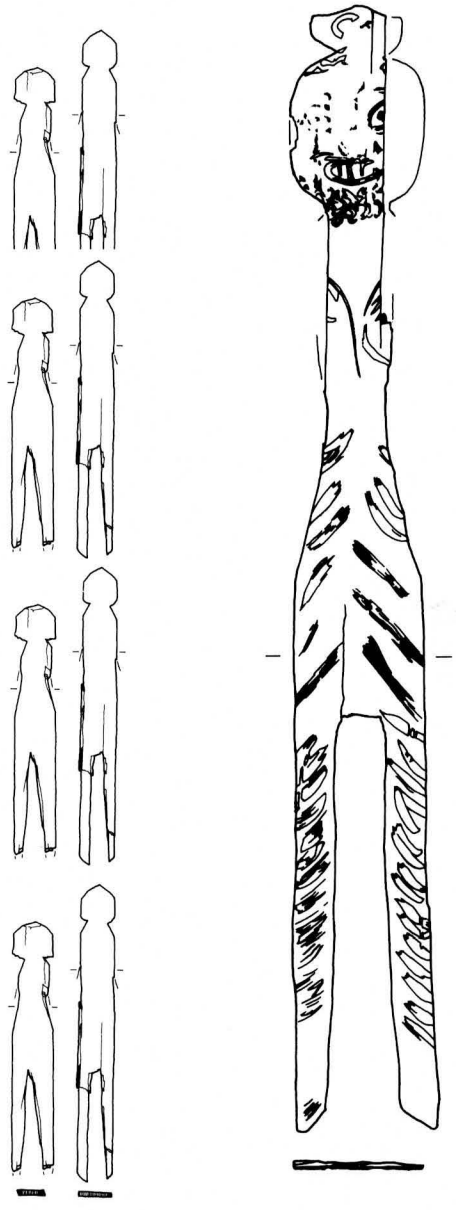
この時代に行われるまじないの多くは招福除災を目的として、道教の思想に基づき行われるものであり、大祓などの国家が行うものと、個人や共同体が行うものがありました。

平城京の条坊道路や道路の交差点などで行われたまじないについて、もう少し見てみましょう。このような場所で行われるまじないは、大きく祓に関するものと、雨乞いなどの祈願に関するものに分けられると考えられています。

平城京の調査の中で出土するまじないに関係する遺物には、人形、斎串、人面墨書土器、土馬などがあります。このうち、人形、人面墨書土器などは主として祓に関連して用いられる祓具であると考えられています。この当時、災厄は疫病神や鬼神が人に取り付くことからおこると考えられていましたので、人形や、顔を墨書した土器に穢れを移して、水に流して穢れを祓うのです。この人形や土器に描かれた顔は疫病神や、鬼神そのものを表していました。斎串は、この穢れを祓う場所の結界を表し、祓われた穢れを外に漏らさぬために用いられます。

一方、土馬は雨乞いのために用いられたものと考えられています。馬は汎世界的に水神と結びつけられることが多く、これを土馬で模し、一部を打ち欠くことによって、水神への生け贄を擬制したのです。ところで、牛馬を屠殺して漢神の祭りに用いることを禁じた記載が『続日本紀』などにみられます。土馬を用いる一方で、本当に馬を生け贄とすることがあったのです。雨乞いのためか、疫神対策のためかは意見が分かれるところですが、実際に生け贄が都の大路で流行していたことは間違いなく、今回の調査で出土している馬の頭骨もまた、生け贄とされたものであったのでしょうか。

大型の人形　今回の調査で全長75㎝を超える人形が1点出土しています。奈良時代中頃までの人形は大きいものでも1尺（30㎝）を超えるものはほとんどありませんでしたが、時代が新しくなると徐々に大型化するようになり、奈良時代末から平安時代には60～130㎝もあるような大型の人形が見られるようになります。今回の大型人形もおそらく奈良時代末頃のものであると考えています。このような大型の人形は、平安時代の御禊の式次第を記した文献記事に「等身人形」とみられるようなものではないかと言われています。



通常の人形（参考品）　　側溝出土の大型品

木製人形図　1/5

発行　奈良市教育委員会　平成17年3月